

赤とんぼ

新美南吉

青空文庫

赤とんぼは、三回ほど空をまわって、いつも休む一本の垣根かきねの竹の上に、チョイととまりました。

山里の昼は静かです。

そして、初夏の山里は、真実ほんとうに緑につつまれています。

赤とんぼは、クルリと眼玉めだまを転てんじました。

赤とんぼの休んでいる竹には、朝顔あさがおのつるがまきついています。昨さくねん年の夏、この別荘べっそうの主人が植うえていった朝顔の結んだ

実が、また生はえたんだらう——と赤とんぼは思いました。

今はこの家には誰もだれいないので、雨戸あまどが淋さびしくしまっています。

赤とんぼは、ツイと竹の先からからだを離はなして、高い空に舞まい

上がりました。

三四人の人が、こつちへやつて来ます。

赤とんぼは、さつきの竹にまたとまって、じつと近づいて来る人々を見ていました。

一番最初にかけて来たのは、赤いリボンの帽子ぼうしをかぶったかあいいおじようちゃんでした。それから、おじようちゃんのお母さんにもつ、荷物をドツサリ持った書生しよせいさん——と、こう三人です。

赤とんぼは、かあいいおじようちゃんの赤いリボンにとまってみたくなりました。

でも、おじようちゃんおこが怒るとこわいな——と、赤とんぼは頭

をかたげました。

けど、とうとう、おじようちゃんが前へ来たとき、赤とんぼは、おじようちゃんの赤いリボンに飛びうつりました。

「あッ、おじようさん、帽子ぼうしに赤とんぼがとまりましたよ。」と、書生さんがさけびました。

赤とんぼは、今におじようちゃんの手が、自分をつかまえに来やしないかと思つて、すぐ飛ぶ用意をしました。

しかし、おじようちゃんは、赤とんぼをつかまえようともせず、「まあ、あたしの帽子ぼうしに！　うれしいわ！」といつて、うれしさに跳とび上がりました。

つばくらが、風のようにかけて行きます。

かあいとおじょうちゃんは、今まで空家あきやだったその家に住みこみました。もちろん、お母さんや書しよせい生せいさんもいっしよです。

赤とんぼは、今日も空をまわっています。

夕陽ゆうひが、その羽はねをいっそう赤くしています。

「とんぼとんぼ

赤とんぼ

すすきの中は

あぶないよ」

あどけない声で、こんな歌をうたっているのが、聞こえて来ました。

赤とんぼは、あのおじようちやんだらうと思つて、そのまま、声のする方へ飛んで行きました。

思つた通り、うたつてるのは、あのおじようちやんでした。

おじようちやんは、庭でぎようずい行水ぎようずいをしながら、一人うたつてたのです。

赤とんぼが、頭の上へ来ると、おじようちやんは、持つてたおもちやの金魚をにぎつたまま、

「あたしの赤とんぼ！」とさげんで、両手を高くさし上げました。赤とんぼは、とても愉快ゆかいです。

書しよせい生さんが、シャボンを持つてやつて来ました。

「おじようさん、背せなか中あちを洗あらいましょうか？」

「いや——」

「だって——」

「いや！ いや！ お母さんでなくつちや——」

「困こまったおじょうさん。」

書しよせい生せいさんは、頭をかきながら歩き出しましたが、朝顔の葉に

とまって、ふたりの話をきいてる赤とんぼを見つけると、右手を大きくグルーツと一回まわしました。

妙みょうな事ことをするな——と思つて、赤とんぼはその指先を見ていました。

つづけて、グルグルと書生さんは右手をまわします。そして、だんだん、その円を小さくして赤とんぼに近づいて来ます。

赤とんぼは、大きな眼をギョロギョロ動かして、書生さんの指先をみつめています。

だんだん、円は小さく近く、そして早くまわって来ます。

赤とんぼは、眼まいをしてしまいました。

つぎの瞬間、赤とんぼは、書生さんの大きな指にはさまれていました。

「おじょうさん、赤とんぼをつかまえましたよ。あげましようか？」

「ばか！ あたしの赤とんぼをつかまえたりなんかして——山田のばか！」

おじょうちゃんは、口をとがらして、湯を書生さんにぶっかけ

ました。

書生さんは、赤とんぼをはなして逃げて行きました。

赤とんぼは、ホツとして空へ飛び上がりました。良いおじょうちやんだな、と思いながら――

空は真青まつさおに晴れています。どこまでも澄すんでいます。

赤とんぼは、窓まどに羽はねを休めて、書生さんのお話お話しに耳をかたむけています、かあいとおじょうちやんと同じように。

「それからね、そのとんぼは、怒おこって大蜘蛛ぐものやつにくいかかりました。くいつかれた大蜘蛛ぐもは、痛いたい！ 痛いたい！ 助けてくれつてね、大声にさげんだのですよ。すると、出て来たわ、出て来た

わ、小さな蜘蛛くもが、雲のように出て来ました。けれども、とんぼは、もともと強いんですから、片端かたはしから蜘蛛くもにくいついて、とうとう一匹びき残こらず殺ころしてしまいました。ホツとしてそのとんぼが、自分の姿すがたを見ると、これはまあどうでしょう、蜘蛛くもの血が、まっかについてるじゃありませんか。さあ大変だつて、とんぼは、泉へ飛んで行って、からだを洗あらいました。が、赤い血はちつともとれません。で、神様ねがにお願いしてみると、お前は、罪つみの無い蜘蛛くもをたくさん殺ころしたから、そのたたりでそんなになつたんだと、叱しかられてしまいました。そのとんぼが今の赤とんぼなんですよ。だから、赤とんぼは良くないとんぼです。」

書しよせい生せいさんのお話は終わりました。

わたしは、そんな酷い事をしたおぼえはないがと、赤とんぼが、首をひねって考えましたとき、おじようちゃんが大声でさげびました。

「嘘だ嘘だ！ 山田のお話は、みんな嘘だよ。あんなかあいらしい赤とんぼが、そんな酷い事をするなんて、蜘蛛の赤血だなんて——みんな嘘だよ。」

赤とんぼは、真実にうれしく思いました。

例の書生さんは、顔をあかくして行つてしまいました。

窓から離れて、赤とんぼは、おじようちゃんの肩につかまりました。

「まア！ あたしの赤とんぼ！ かあいい赤とんぼ！」

おじようちやんの瞳ひとみは、黒く澄すんでいました。

暑あつかった夏は、いつの間にかすぎさつてしまいました。

朝顔あさがおは、垣根かきねにまきついたまま、しおれました。

鈴虫すずむしが、涼すずしい声でなくようになりました。

今日も、赤とんぼは、おじようちやんに会いにやって来ました。

赤とんぼは、ちよつとびっくりしました。それは、いつも開い

ている窓まどが、皆みなしまつているからです。

どうしたのかしら？ と、赤とんぼが考えたとき、玄関げんかんから

誰だれか跳とび出して来ました。

おじようちやんです。あのかあいおじようちやんです。

けれども、今日のおじようちやんは、悲しい顔つきでした。そ

して、この別荘べっそうへはじめて来たときかぶってた、赤いリボンの帽子ぼうしを着け、きれいな服ふくを着ていました。

赤とんぼはいつものように飛んで行って、おじょうちゃんおじょうちゃんの肩かたにとまりました。

「あたしの赤とんぼ……かあい赤とんぼ……あたし、東京へ帰るのよ、もうお別れよ。」

おじょうちゃんおじょうちゃんは、小さい細い声で泣くなように言いました。

赤とんぼは悲しくなりました。自分もおじょうちゃんおじょうちゃんといっしょに東京へ行きたいなと思いました。

そのとき、おじょうちゃんおじょうちゃんのお母さんと、赤とんぼにいたずらをした書生しよせいさんが、出てまいりました。

「ではまいりましょう。」

皆^{みな}、歩き出しました。

赤とんぼは、やがておじょうちゃんの肩^{かた}を離^{はな}れて、垣根^{かきね}の竹の先にうつりました。

「あたしの赤とんぼよ、さようなら——」

かあいのおじょうちゃんは、なんべんもふりかえっていいました。

けど、とうとう、皆^{みな}の姿^{すがた}は見えなくなってしまうたのです。

もう、これからは、この家は空家^{あきや}になるのかな——赤とんぼは、しずかに首をかたむけました。

淋^{さび}しい秋の夕方など、赤とんぼは、尾花^{おぼな}の穂先^{ほさき}にとまって、あ
のかあいいおじょうちやんを思い出しています。

青空文庫情報

底本：「ごんぎつね 新美南吉童話作品集」てのり文庫、大日本図書

1988（昭和63）年7月8日第1刷発行

親本：「校定 新美南吉全集」大日本図書

入力：もりみつじゅんじ

校正：鈴木厚司

2003年5月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

赤とんぼ

新美南吉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>